様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　６月１７日現在

研究種目：若手研究（ｽﾀｰﾄｱｯﾌﾟ）
研究期間：2007～2008
課題番号：１９８２００１８
研究課題名（和文）　フィリピン地方都市における医療と宗教の近代的再編成プロセスに関する人類学的研究
研究課題名（英文）　An Anthropological Study of Modern Reorganization of Medicine and Religion in a local City in the Philippines

研究代表者
東　賢太朗（AZUMA KENTARO）
宮崎公立大学・人文学部・講師
研究者番号：４０４３８３２０

研究成果の概要：
本研究の目的は、フィリピンの近代化における医療と宗教という２つのシステム間にみられる関係性の解体と再構築の過程、すなわち「再編成プロセス」を、地方都市における文化人類学的な調査研究から実証的に解明することである。
その際に、とくに(1)近代医療とカトリックの関係性の変容、(2)近代医療と民間医療の関係性の変容、(3)カトリックと民衆信仰の関係性の変容、の３項目に着目して研究を進める。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,310,000	0	1,310,000
2008 年度	1,340,000	402,000	1,742,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,650,000	402,000	3,052,000

研究分野：文化人類学
科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学
キーワード：文化人類学、医療、宗教、近代、フィリピン

１．研究開始当初の背景
本研究開始当初の背景は、以下の通りである。
これまでフィリピンでは、医療開発の分野において、民間医療の利用に関する研究がなされてきた。しかしながら、それら近代医療中心の研究は、民間医療にスピリチュアルな宗教的要素が複雑に絡み合っている状況を軽視しがちである。またフィリピンにおいては、外来のカトリシズムと在来の精霊信仰が混交しつつ民衆信仰体系を織りなしており、そのシンクレティズムに関する研究は宗教学を中心に行われてきた。しかしながら、それら研究はカトリック神学における教義の領域内にとどまり、とくに民間医療行為も含む民衆信仰の現場での実践については言及を避けがちである。一方、フィリピンの文化人類学では、これまで呪医を対象にして、民衆信仰と民間医療の双方に乗り入れる研究の蓄積がある。しかしながら、それらの多くは微視的な民族誌的報告であり、近代化という大きな社会変動の要素を取り入れることに成功しているとはいいがたい。
本研究は、これら近年のフィリピンにおけ

る医療（近代医療と民間医療）や宗教（カトリックと民衆信仰）についての分散した研究を、「医療と宗教の近代的再編成プロセス」という１つの枠組みのもとにまとめ提示しようとするものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、フィリピンの近代化にともなう医療と宗教両システムの再編成プロセスを、地方都市における文化人類学的な調査研究から実証的に解明することである。

第二次大戦後の独立以降、近代化はフィリピンにも大きな社会変容をもたらした。特に、発展途上国に対する先進国の開発や援助という外的な作用は、従来の社会システムの配置に根本的な再編成の必要性を要請した。開発や援助にある程度の落ち着きがみられる現在でも、通貨危機や政情不安、自然災害など、つねに社会変動を引き起こす要因は消えることはない。またグローバル状況下において、ますます活発化する人とモノと情報の移動も、ウチとソトの境界を日々曖昧なものにしている。

このように不確定で脆弱な社会的状況において､医療と宗教という２つのシステムは、人々の生活の救済ネットとなりうる。前者が、科学技術によって生物学的な健康の問題解決の役割を担うとすれば、後者は信仰によって生のスピリチュアルな健康状態を保とうとする。しかしながら、医療と宗教が相互に独立しつつ、異なった領域のケアを担うという両システムの棲み分け状況は現在崩れつつある。フィリピンの近代化において、医療と宗教という２つのシステム間にみられる抑圧、拮抗、葛藤、混交、分裂、流用といった関係性の解体と再構築の過程を、ここでは「再編成プロセス」とよぶ。そして、医療と宗教の再編成プロセスは、救済を必要とする人々、特に社会的弱者に対して大きな影響を与えている。本研究は、両システムの再編成プロセスに注目することにより、それに起因する社会的諸問題の諸相を解明しつつ、最終的には解決することを志向する、学術的かつ実践的な性質を持つ研究である。

３．研究の方法

フィリピン地方都市における医療と宗教の再編成プロセスをめぐる幅広い問題系のうち、本研究では、(1) 近代医療とカトリックの関係性の変容、(2) 近代医療と民間医療の関係性の変容、(3) カトリックと民衆信仰の関係性の変容、の３項目に特に注目する。

(1) 近代医療とカトリックの関係性の変容

近代医療とカトリックについては、調査地で関連文献や公的な資料（医療や公衆衛生についての行政資料や報告書、カトリック教会発行の文書等）が比較的入手しやすいので、全体像を把握するためにも、この項目から本研究を着手する。文献や資料の収集と検討を行った後、近代医療とカトリックのそれぞれのセクターに対する参与観察や聞き取りによるフィールド調査を行い、文献調査の成果と比較する。調査対象は、近代医療に関してはロハス市内の保健センターと公立・私立病院、クリニックや薬局、カトリックに関してはロハス市内カピス大司教館と３つの小教区教会、および小聖堂である。また加え、医療と宗教の葛藤の原因となる癒しについてカリスマ刷新運動の活動の参与観察と、リーダーやメンバーへの聞き取りを行う。フィールド調査以外の時期について、文献資料の収集と検討、およびフィールドで収集した一次資料の整理と分析を進める。

(2) 近代医療と民間医療の関係性の変容

(3) カトリックと民衆信仰の関係性の変容

研究項目 (2) と (3) に関しては、民間医療と民衆信仰の活動を行う呪医を、文献調査とフィールド調査による研究対象とする。文献調査について、調査地で入手可能な呪医についての文献や資料の収集と検討を行う。フィールド調査に関しては、まず研究項目(1)で示した近代医療とカトリックの諸セクターに対する聞き取りを行い、支配的立場からの呪医に対する抑圧状況を確認する。その上で、呪医についてのフィールド調査を実施する。申請者のこれまでの調査から、ロハス市内で活動する呪医は100名程度存在することが判明している。調査期間中は、100 名中できるだけ数多くの呪医に対し民間医療と民衆信仰の活動に関する参与観察と聞き取りを行い、それぞれ近代医療とカトリックによる抑圧と、それに対する対応の状況から関係性の変容について明らかにする。また、呪医のクライアントに対しても聞き取りを行い、社会的弱者の医療と宗教に関する意識調査を行う。フィールド調査以外の時期について、文献資料の収集と検討、およびフィールドで収集した一次資料の整理と分析を継続する。

４．研究成果

本研究の実施により、以下の３点について明らかになった。

(1) 近代医療とカトリックの関係性の変容

本項目においては、両者間に生じた葛藤がどのように調停され、最終的に医療システムと宗教システムがどのように編成・確立されていくのかというプロセスを明らかにした。

従来当該地域の医療システムと宗教システムにおける支配的立場にあった近代医療とカトリックであるが、近年特に後者が前者の領域に立ち入ることにより、ときに葛藤が生じることがある。その大きな要因として、カトリック信徒への癒しの広まりが挙げられる。カトリックの癒しは祈りと聖水の塗付

によって行われ、また原理的には神に敬虔であれば薬を使用しなくても全ての病が治るとされている。カトリック教会所属の司祭や、近年活動が活発化しているカリスマ刷新運動によって癒しは行われている。癒しの教義と近代医療による薬の処方はときに相容れず、近代医療側からは科学的な治療と処方の必要性が主張され、カトリック側からは高額な薬代と患者の薬依存の状況が非難される。しかしながら、両者はそれぞれが医療システムと宗教システムにおいて支配的立場にあることを意識しており、その独立性を維持するために、あえて互いの活動を黙認や放置することも多い。本研究においては、葛藤が生じようとする際に、近代医療とカトリック双方から、「医師は身体的な治療、神はスピリチュアルな癒し」というすみ分けの言明が頻繁に発せられる状況が明らかになった。

（2）近代医療と民間医療の関係性の変容

本項目では、近代医療から呪医への薬草をめぐる両義的な姿勢と、医療と宗教の狭間で活動を継続し、両システムを架橋する呪医の生存戦略について明らかにした。

近代医療の普及はほぼ完了したフィリピン地方都市であっても、民間医療を行う呪医は現在でも数多く活動を継続しており、またその活動内容も近代化にあわせ変容している。呪医に対し、近代医療は誤った医学知識に基づく危険な治療行為を行う「偽医者」として、強硬な抑圧の姿勢を見せている。しかしながら、1997 年発令の「伝統・代替医療条例」の影響により、呪医の用いる薬草のみ利用可能であるという両義的な態度も同時に示している。対する呪医は、近代医療に対して抵抗するよりも、宗教的な疾病観によって医療と棲み分けを試みるか、近代医療の知識を学ぶことにより医療に近づくという対応を見せている。特に本研究では、呪医の公衆衛生関連セミナーへの参加による近代医療の知識とライセンス獲得や、親族・友人関係を利用した医療従事者との個人的ネットワーク構築といった生存戦略のあり方が明らかになった。

（3）カトリックと民衆信仰の関係性の変容

本項目では、民衆信仰実践者である呪医の活動のうち、カトリックから異端であると強く批判される精霊との関係や交渉をめぐる、葛藤や軋轢、またその回避の方策について明らかにした。

精霊信仰は、自然界のありとあらゆるものに神が宿るとするアニミズムの流れをくむものであり、人々の世界観や疾病観と深いつながりを持っている。しかしながら、カトリックの一神教的教義においては神以外の超自然的存在を認めず、それゆえ、呪医が治療において精霊の力を借りたり、精霊に対し供物儀礼を行うことは、カトリック的な解釈によれば悪魔崇拝であるということになる。それに対し、多くが敬虔なカトリック信徒である呪医は、従来の精霊世界をカトリック教義の中に位置づけ再解釈するなどしてカトリック教会や司祭との軋轢を回避している。このような、民衆信仰実践を具現する呪医に対する公式カトリックの批判と、それに対する呪医側の対応は、近代化における宗教システムの再編成の一環であると考えられる。本研究では特に、呪医が教会活動や宗教組織に熱心に参加することにより、自らのカトリック信徒としての敬虔さを強調する状況や、解釈によりカトリックの聖霊と民衆信仰の精霊世界を相同、または類似のものとして位置づける実践が明らかになった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 東賢太朗、「呪術・他者・理解―ポスト／構造主義と、あるエピソードを経由して」、『社会人類学年報』、第 34 号、93-117、2008 年、有

② 東賢太朗、「書評：阿部年晴・小田亮・近藤英俊編『呪術化するモダニティ―現代アフリカの宗教的実践から』」、『宗教研究』 、第 357 号、404-411、2008 年、無

③ 東賢太朗、「書評：石井美保著『精霊たちのフロンティア―ガーナ南部の開拓移民社会における＜超常現象＞の民族誌」、『文化人類学』、第 72 巻 4 号、530-533、2008 年、無

④ 東賢太朗、「多言語状況下における英語使用と不使用―フィリピンの事例から」、『英語の『現場』にて―その広がりと多様性（宮崎公立大学公開講座 12）』、141-159、2007 年、無

⑤ 東賢太朗、「呪術とアイロニーについての人類学的覚書」、『九州人類学会報』、34 号、48-54、2007 年、有

〔学会発表〕（計２件）

① 東賢太朗、「リアルな謎のリアリティ―ミステリーの人類学のための試論」（分科会：「ミステリーの人類学」、代表者：東賢太朗）、日本文化人類学会第 43 回研究大会、2009 年 5 月 30 日、大阪国際交流センター

② 東賢太朗、「身体・他者・共同性―「変身」の人類学にむけて」（分科会：「メタモルフォーシスの人類学」、代表者石井美保）、日本文化人類学会第 42 回研究大会、2008 年 5 月 31 日、京都大学

６．研究組織
(1)研究代表者
東　賢太朗（AZUMA KENTARO）
宮崎公立大学・人文学部・講師
研究者番号：４０４３８３２０

(2)研究分担者

(3)連携研究者